

観音扉の作り方

左官吉田
吉田 一正

前回(本誌2024年2月号)では、漆喰を練る前段階で、材料について紹介いただきました。今回は実際に漆喰を練るところから施工の面切りまでを紹介します。(編集部)

漆喰を塗るなら真夏が良い

④⑧漆喰を塗るなら真夏が良い。

朝まだきから9時を過ぎてもなお、辺りはたっぷりと潤った空気に満たされ、塗り付けにしろ、役摺りにせよ、完全な場をじっくり作る時間が許されている。強い風に悩まされることも少なく、漆喰とよく相談をしながら、ゆっくりこなしていくことができるからだ。

午後に向けて急速に湿気が失われていく中、鏝を硬く、よく滑るものに変えながら、しっかりと壁に圧を加え、石灰粒子の密度を徐々に高めていく。仕上がった漆喰の表面は磁器のように硬く、なめらかであり、まったくもって漆と見まがうまでに艶めかしい。

「漆を喰らう。」

施工場所に室内外を問わず、施工時の湿度の変化にも柔軟に対応する。漆喰という名の所以である。

④⑨漆喰をかけるにあたって、用意すべき道具がある。まずは鏝板だ。

鏝板は杉の柾目、赤身で作る。できるだけ北方で育った杉が良い。理由は、杉が木材として軽いこと。腕にかかる負担が少なく、使い勝手が良い。次に、赤身は油を含んでいるから水に強いこと。最後に、寒い地域の杉は目がつんでいるから、である。

砂摺りを使うことで夏目が痩せて冬目が立ち、漆喰を板摺りすれば昞をきれいにほどこしてくれる。板摺りとは、鏝板の冬目に逆らって材料を揉み、麻昞を散らす作業のことだ。鏝板の角で定規を支えながら仕事をしたりもするの



▲漆喰定規。幅1寸、長さ6寸、厚み2分。

で、大きさは1尺角程度のものが扱いやすい。

二つ目は定規。これは2種類用意する。まずは、いわゆる漆喰定規。

幅1寸、長さ6尺、厚み2分。杉の柾目、赤身で作る。理由は鏝板と同議である。長手の両脇を厚さ1分残して刃欠けにする。両刃にするのは、定規が薄くとも、水を吸って一方へ反らせないためだ。新品の定規を使うなら、杉の赤身は油がある分、灰汁を出すので、ひと晩石灰を溶かし込んだ水に漬けて灰汁抜きをしておく必要がある。

もうひとつは、挟み定規。

扉を開いたときの実柱の見附と戸裏の空き、扉を閉めた